三重県埋蔵文化財調査報告３２５

鳥居本遺跡（第４次）発掘調査報告

－三重県津市一志町所在－

２０１１（平成２３）年２月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

１．　本書は、三重県津市一志町に位置する、鳥居本遺跡の第４次発掘調査報告書である。（調査次数は、県および旧一志町での調査を含む。）

２．　調査の原因は、平成21年度の地域活力基盤創造交付金（道路）事業である。当該調査にかかる費用は、三重県県土整備部が負担した。

３．　当該調査及び整理体制は下記のとおりである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ｉ課　主幹　上村安生、主査　西村美幸・岩脇成人

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ｉ課・活用支援課

発掘調査業務委託先　　株式会社文化財サービス（土工委託）

４．　調査期間及び面積は下記のとおりである。

平成21年６月10日　～　平成21年８月３日　301㎡

５．　調査にあたっては、地元の方々、三重県県土整備部道路整備室、津建設事務所、及び津市教育委員会からご協力を得た。

６．　報告書の編修、執筆及び遺物写真撮影は西村が行なった。

７．　本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　　例

＜地図類＞

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、主要地方道一志嬉野線の地域活力基盤創造交付金（道路）事業の工事図面、旧一志町作成の1/2,500都市計画図である。

2　挿図の方位は、世界測地系・測地成果2000による座標北で表している。なお、この地域の磁北は真北に対して６°40´西偏している。（平成11年国土地理院）

＜遺構類＞

1　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（1999年版）を用いた。

2　本書で使用した遺構表示略号は下記のとおりである。

ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　ＳＨ：竪穴住居　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＥ：井戸　ＳＸ：墓　Ｐｉｔ・Ｐ：柱穴・小穴

3　柱穴の「掘形」とは、柱を据えるために掘削した穴のラインを指す。

＜遺物類＞

1　当報告での遺物実測図類は実物の１/４を基本としている。

2　遺物実測図は、当報告書を通じて通番としている。

3　当報告書での用語は、「つき」は「杯」に、「わん」は「椀」に統一している。

4　出土遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号 ･････････････････ 出土遺物実測図掲載番号である。

実測番号 ･････････････ 実測段階の登録番号である。

様・質 ･･････････････ 「弥生土器」「土師器」などの区分をここに示した。

器種など ･････････････ 遺物の器種を示した。

グリッド ･････････････ 調査時に設定したグリッド名を記した。

遺構・層名等 ････････ 遺物の出土した遺構や層名などを記した。

大きさ（㎝） ････････ 遺物の大きさを示す。（口）は口縁部径、（底）は底部径、（高台）は高台部径、（高）は器高を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。

調整・技法の特徴 ････ 主な特徴を示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土 ･････････････････ 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調 ･････････････････ その遺物の代表となる色調を記載した。表記は前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度 ･･････････････ その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分を示す。

特記事項 ･････････････ 遺物の特徴となる事項を記した。

＜写真図版＞

1　写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。

2　出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。

3　遺物の写真図版は、縮尺不同である。

本　文　目　次

第１章　前　言
　１　調査に至る経緯 …… １
　２　調査経過 …… １
　３　文化財保護法にかかる諸通知 …… １
　４　調査の方法 …… １
第２章　位置と環境
　１　地理的環境 …… ２
　２　歴史的環境 …… ２
第３章　遺　構
　１　基本層序 …… ４
　２　遺構の概要 …… ４
第４章　遺　物
　１　弥生時代の遺構出土の遺物 …… １１
　２　その他の遺構出土の遺物 …… １１
　３　包含層等出土の遺物 …… １２
第５章　調査のまとめ
　１　弥生土器の特徴について …… １６
　２　鳥居本遺跡の遺構変遷について …… １６
　３　まとめ …… １６

図　版　目　次

第１図　遺跡位置図 …… ３
第２図　遺跡地形図 …… ４
第３図　調査区位置図 …… ５
第４図　遺構平面図 …… ７
第５図　土層断面図 …… ８
第６図　ＳＫ412遺物出土状況図、ＳＫ406・ＳＤ403平面図・土層断面図 …… ９
第７図　ＳＫ417、Pit 遺物出土状況図 …… １０
第８図　出土遺物実測図（１） …… １４
第９図　出土遺物実測図（２） …… １５
第10図　鳥居本遺跡（第２～４次）遺構の変遷（１） …… １７
第11図　鳥居本遺跡（第２～４次）遺構の変遷（２） …… １８

表　目　次

第１表　遺構一覧表 …… １０
第２表　出土遺物観察表（１） …… １２
第３表　出土遺物観察表（２） …… １３

写　真　図　版　目　次

写真図版１　調査区全景 …… １９
写真図版２　調査前風景、工事終了後風景 …… ２０
写真図版３　１地区中心部、２・３地区全景 …… ２１
写真図版４　４地区南半、５地区全景 …… ２２
写真図版５　５地区北半、５地区中心部 …… ２３
写真図版６　ＳＫ412遺物出土状況、ＳＫ417遺物出土状況 …… ２４
写真図版７　弥生土器甕（28）出土状況、弥生土器壺（23）出土状況 …… ２５
写真図版８　須恵器杯（46）出土状況、土師器杯（47）出土状況 …… ２６
写真図版９　ＳＫ406土師器杯（30）出土状況、ＳＫ402半裁状況 …… ２７
写真図版10　作業風景、発掘調査説明会風景 …… ２８
写真図版11　出土遺物（１） …… ２９
写真図版12　出土遺物（２） …… ３０

第１章　前　言

１　調査に至る経緯

鳥居本遺跡は、旧一志郡一志町の遺跡台帳で124番として登録され、平成18年に津市に合併した際に旧一志町の整理番号ｈが付されｈ124番となった。

当遺跡は、住宅団地進入路に伴い、昭和48年11月３日～13日、及び12月23日～27日に、一志町教育委員会によって800㎡が調査された。（第１次調査①）

その後、近畿自動車道関・伊勢第８次区間（久居～勢和）の建設に伴い、昭和62年９月24日～翌年３月７日、及び昭和63年５月16日～７月27日に、三重県教育委員会によって11,540㎡が調査された。（第２次調査②）

また、工場拡張に伴い、平成２年３月５日～３月23日に、一志町教育委員会によって450㎡が調査された。（第３次調査③）

その後、鳥居本遺跡の中を通っている県道（主要地方道）一志嬉野線の道路幅拡幅が計画された。これに伴い、県教育委員会および三重県埋蔵文化財センターでは、遺跡の保存のため県土整備部と協議を行った。その結果、本調査が必要な範囲を確定するため、鳥居本遺跡内の事業対象地1,500㎡について、範囲確認調査を行うこととなった。

範囲確認調査は、平成21年３月２日に実施した。その結果、調査坑№３～８（第３図）の間で小穴や溝といった遺構、古墳時代以降の土師器片などの遺物が出土した。この結果をうけて、さらに保護のための協議を重ねた結果、当該箇所の600㎡を対象に、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

２　調査経過

発掘調査は、平成21年度に株式会社文化財サービスに土工部門の委託を行って実施した。委託期間は、６月10日～８月３日であった。調査面積は、掘削の深さが50～80㎝と深かったため、隣接する県道と畑地が崩壊するのを防ぐための控えをとり、301㎡となった。現地調査は６月24日から開始し、７月29日に終了した。当該事業地が県道一志嬉野線の隣接地で、現地での説明会を行うことが困難であった。このため、調査終了後の10月10日（土）に、津市川合公民館で出土資料とスライドによる説明会を開催し、31名の参加者を得た。

３　文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等の諸通知は、以下により行った。

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長宛）
　平成21年５月18日付け津建第119号
・文化財保護法第99条の第１項（県教育長宛）
　平成21年６月15日付け教埋第126号
・遺失物法による文化財発見・届出通知
　（津南警察署長宛）
　平成21年８月21日付け教委第12－4409号

４　調査の方法

調査区の設定　調査範囲（調査区）内の任意の２点を結ぶ線を基準線とし、それにしたがって４ｍ×４ｍの方眼（グリッド）を設定し、調査の基本単位とした。グリッド名の表記は、北西隅を表示の原点とした。その後、遺構実測の段階で、国土座標（新座標）を付与し、調査区全体の位置関係を座標で把握できるようにした。

表土除去　包含層より上は、重機（バックフォー）によって表土除去を実施した。

検出・掘削　表土除去後、人力による遺物包含層掘削を実施し、その後、遺構検出・遺構掘削を行った。

遺構略図　遺構検出時等、遺構が確認された場合には、グリッド単位で1/40の遺構略図を記録した。ここには、埋土の状況及び遺構の重複関係を記したほか、遺物取り上げにおける遺構番号の台帳としても使用した。

遺構番号の付与　遺構番号付与は、小穴以外は遺構種別を超えた通し番号とした。調査時には１番からスタートしたが、整理時に過去の調査との重複を避けるため、番号の前に40を追加し、401番からとした。小穴の番号については、遺物の出土した小穴のみを対象とし、グリッドごとに通し番号を付与した。

実測　調査区の土層断面図は、1/20縮尺で実測を行った。遺物出土状況や個別遺構の実測図・断面図は

1/10もしくは1/20縮尺で実測を行った。調査区全体の遺構実測も手描きとし、1/20縮尺の作図とした。

遺構写真撮影　基本的に４×５インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルフィルムで撮影し、補助・メモ的にブローニー判及び35㎜判の白黒ネガおよびカラーリバーサルフィルムも使用した。

遺物写真撮影　報告書掲載遺物から任意に選択し、４×５インチ判及びブローニー判の白黒ネガフィルムで撮影した。　（西村美幸）

〔註〕

① 『鳥居本遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会 1975年では、２回の調査期間を第１次・第２次としているが、今回は、この年度の調査をまとめて第１次調査とした。

② 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊５－』三重県教育委員会 1991年、『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊10－』三重県教育委員会 1991年

③ 『鳥居本遺跡第三次調査報告』一志町教育委員会 1992年

第２章　位置と環境

１　地理的環境

鳥居本遺跡（１）は、南西部の丘陵から北東方向に延びる標高20ｍほどの尾根上に位置している。1.2㎞ほど北側には、雲出川が東に向かって流れて、２㎞ほど東で支流の中村川と合流している。雲出川をさかのぼると、旧伊賀国や旧大和国に至る。鳥居本遺跡のある旧一志郡付近はこれらの地域と旧伊勢をつなぐ交通の要衝であった。

２　歴史的環境

鳥居本遺跡のある旧一志郡付近周辺には、古くからの多くの遺跡が確認されている。ここでは、鳥居本遺跡のこれまでの調査成果と、弥生時代から古代についての周辺の遺跡状況についての概略を述べる。

（１）鳥居本遺跡のこれまでの調査

第１次調査では、弥生時代前期から後期にかけての溝や土坑、弥生時代中期の方形周溝墓、飛鳥時代の住居跡、室町時代の溝跡などが確認された[①]。

第２次調査では、弥生時代中期後葉の竪穴住居、方形周溝墓、土坑、飛鳥から平安時代にかけての住居跡、井戸、鎌倉時代以降の区画溝が確認された。なかでも、弥生時代の土器は伊勢Ⅳ様式のものが多量に出土し、良好な資料となっている[②]。

第２次調査の西隣を調査した第３次調査では、奈良時代の土坑と、第２次調査で見つかった室町時代遺構の区画溝の続きが確認された[③]。

（２）周辺の遺跡

弥生時代　前期には、小谷赤坂遺跡（２）で竪穴住居、土坑が確認されている[④]。中期には、馬ノ瀬遺跡（３）で竪穴住居が確認されている[⑤]。また、片野遺跡[⑥]（４）や、中村川の対岸にある下之庄東方遺跡[⑦]（５）でも方形周溝墓群が確認されている。後期前半には、小谷赤坂遺跡及び清水谷遺跡（６）で環濠を持つ大規模な集落が確認され、小谷Ａ遺跡（７）では方形周溝墓群が確認されている[⑧]。

下之庄東方遺跡では、中期から後期後半まで方形周溝墓が築かれ、大型のもの、掘立柱建物も確認されている。また、長持元屋敷遺跡（８）では方形周溝墓と竪穴住居が確認され[⑨]、舞出北遺跡（９）では、弥生時代後期から古墳時代にかけての周溝墓と掘立柱建物が確認されている[⑩]。

古墳時代　前期には、堀田遺跡（10）の旧流路から木製品を含む多くの遺物が出土している[⑪]。また、鳥居本遺跡の南西にある丘陵には、多くの群集墳が築かれ、総数は300基を超える。この時代の住居は、片野遺跡、下ノ庄東方遺跡等で確認されている。

古代　一志郡内には古代寺院が多く建立される。鳥居本遺跡周辺には、八太廃寺（11）、天花寺廃寺[⑫]（12）がある。また、堀田遺跡の大溝上層からは多数の土器が出土し、郡衙関連の施設があったことが想定されている[⑬]。この時代の集落には、片野遺跡、平生遺跡（13）等があり、畿内の影響の強い暗文を施した土師器が出土している[⑭]。長持元屋敷遺跡、天保遺跡[⑮]（14）、上野垣内遺跡[⑯]（15）等でも、古代の建物が確認されている。　（西村美幸）

〔註〕

① 『鳥居本遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会 1975年

② 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊５－』三重県教育委員会 1991年、『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊10－』三重県教育委員会 1991年

③ 『鳥居本遺跡第三次調査報告』一志町教育委員会 1992年

④ 『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅶ』三重県埋蔵文化財センター 2005年

⑤ 『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会 1991年

⑥ 『片野遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1991年、『片野遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会 1986年、『片野遺跡第三次発掘調査報告』一志町教育委員会 1989年、『片野遺跡Ⅳ』一志町教育委員会 2002年

⑦ 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ　下之庄東方遺跡（高畑地区）』三重県教育委員会 1987年、『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ　下之庄東方遺跡（小野・四反畑・夜ノ堀地区）』三重県教育委員会 1988年、和氣清章「下之庄東方遺跡（前山地区）」『三重県史資料編考古１』三重県 2005年

⑧ 『小谷Ａ遺跡（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2010年

⑨ 『長持元屋敷遺跡発掘調査報告』久居市教育委員会 1980年

⑩ 『一般道路23号線中勢道路（13工区）建設に伴う舞出北遺跡発掘調査報告２』三重県埋蔵文化財センター 2010年

⑪ 『堀田遺跡第6次調査』三重県埋蔵文化財センター 2005年

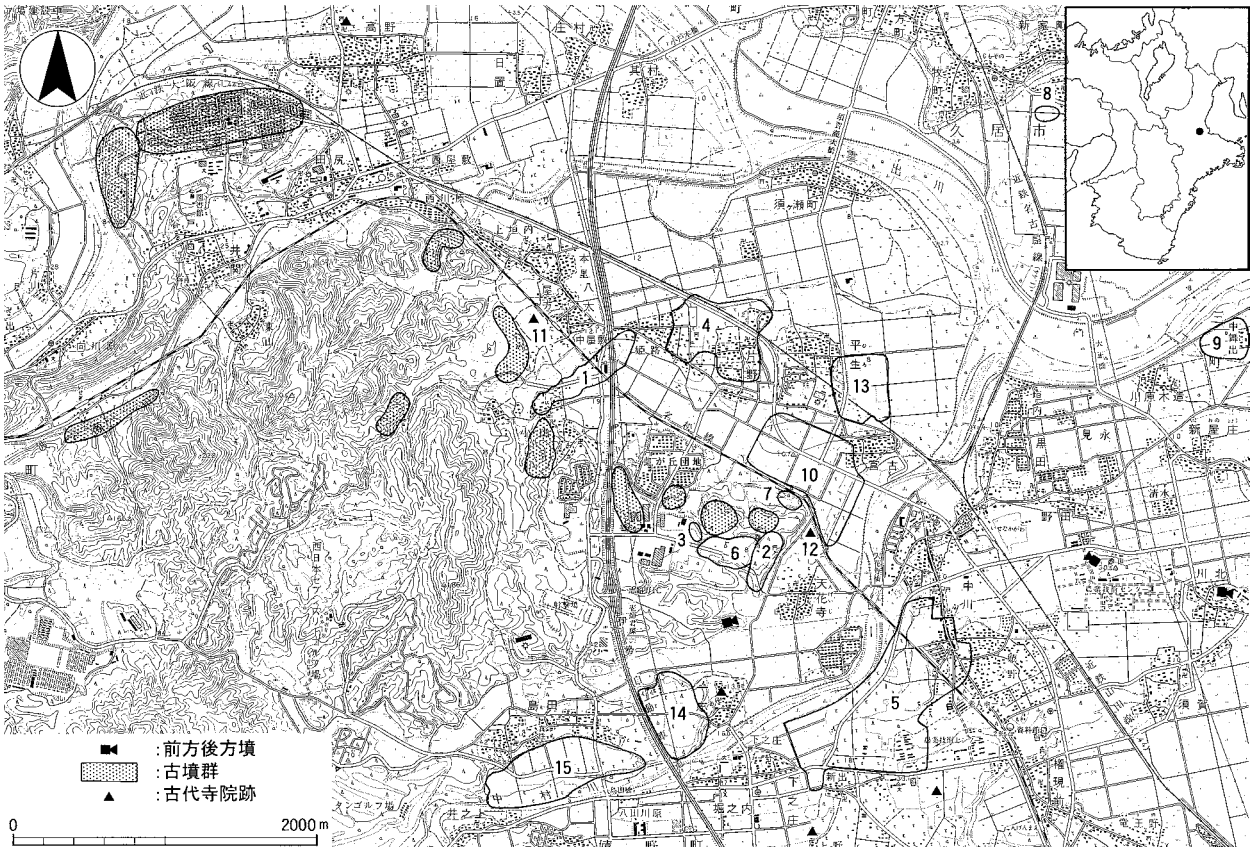
⑫ 『昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981年

⑬ 伊藤裕偉「ふたつの「こおりいち」～古代一志郡家に関する覚書～」『斎宮歴史博物館研究紀要11』斎宮歴史博物館 2002年

⑭ 『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡調査団 1976年、『平生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1994年

⑮ 「天保遺跡Ａ・Ｂ地区」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊６－』三重県教育委員会 1991年

⑯ 「上野垣内遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1980年



第１図　遺跡位置図（1：50,000）［ 国土地理院「大仰」1：25,000より作成 ］

第３章　遺　構

１　基本層序

鳥居本遺跡は、津市一志町小山の丘陵裾部から姫路・片野集落へとのびる標高13～20mの中位段丘西端近くに位置している。今回の調査箇所の調査前現況は畑地である。

基本層序は、第Ⅰ層が耕作土、第Ⅱ層が黒褐色系の土、第Ⅲ層がにぶい黄橙色シルトもしくはにぶい黄橙色砂質土（基盤層）である。５地区では、第Ⅱ層を数層に分けることができた。

今回の調査では、第Ⅲ層の上面で遺構を確認した。しかし、土層断面図を観察すると、第Ⅱ層上面から切り込んでいる遺構もある。本来は第Ⅱ層と第Ⅲ層の上面でそれぞれ遺構を確認すべきであったと考えられるが、第Ⅱ層上面では黒褐色系の土層に同色の遺構となり、検出が困難であったため、第Ⅲ層上面まで下げて遺構確認を行った。

２　遺構の概要

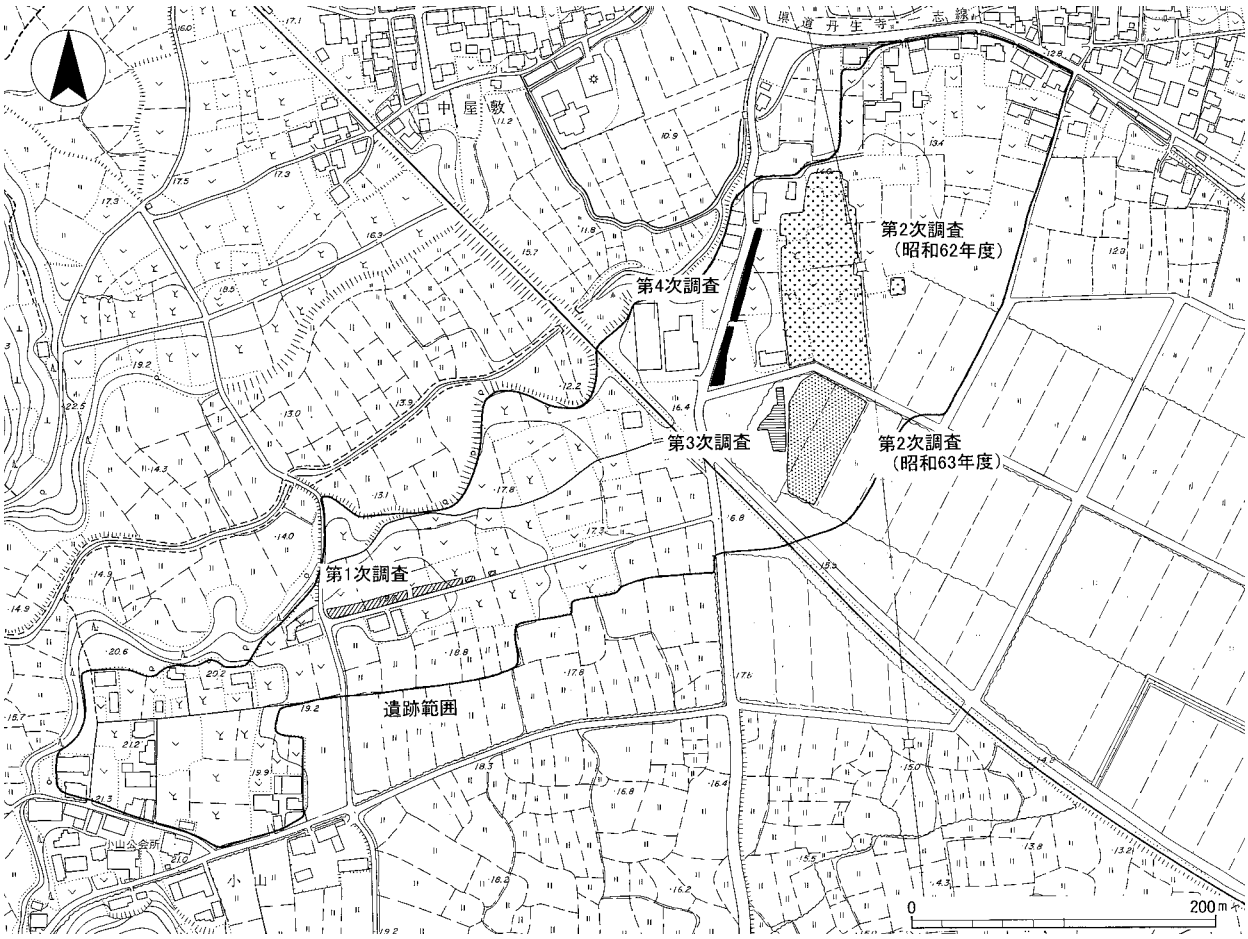
今回の第４次調査では、弥生時代中期（第Ⅳ様式）の土坑６基、平安時代の土坑１基、中世の溝３条、土坑１基、時期不明の土坑４基、溝２条、及び弥生時代から奈良時代にかけての小穴等を確認した。以下、主な遺構について概述するが、数値等は遺構一覧表を参照されたい。

（１）弥生時代の遺構

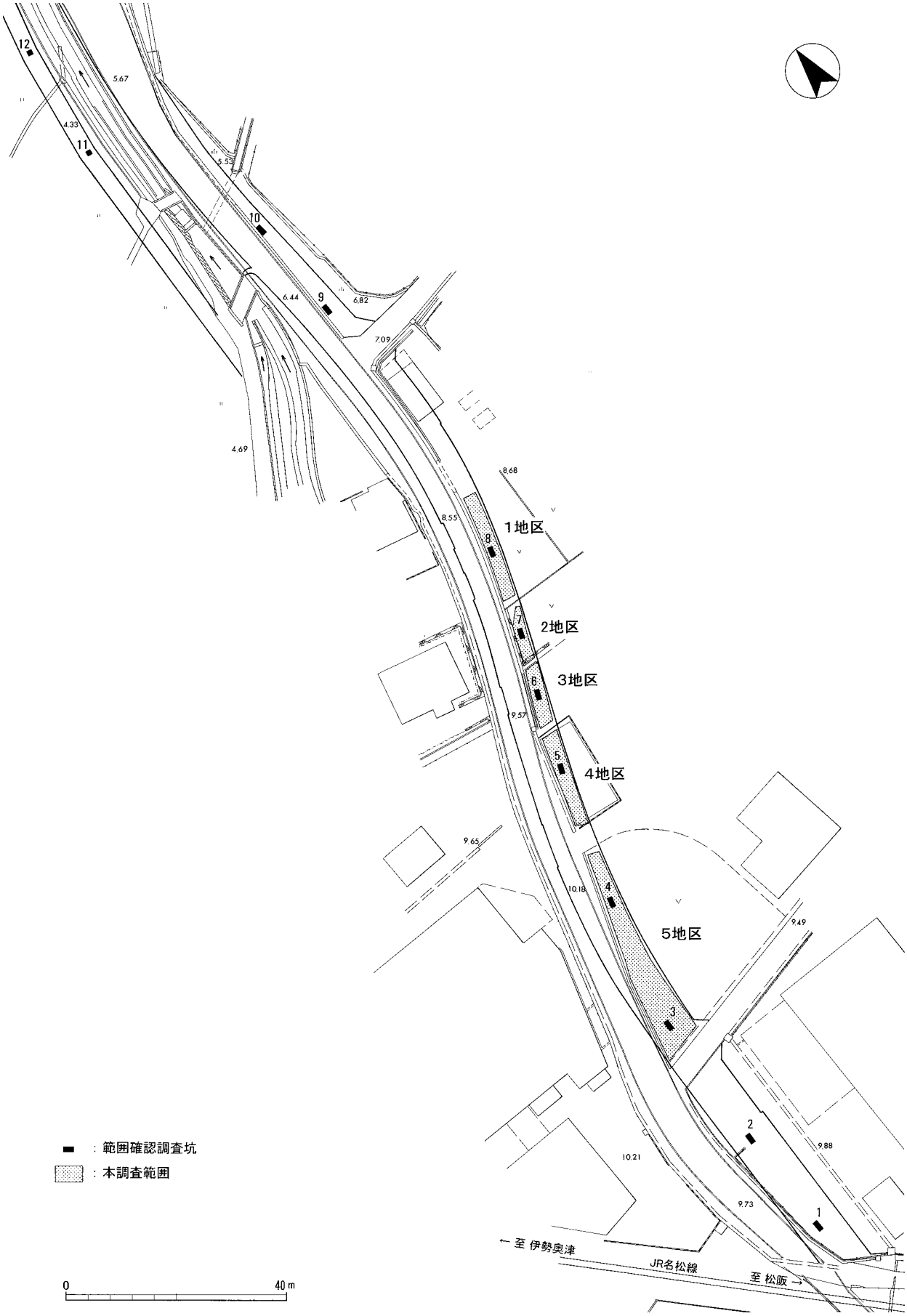
ＳＫ402　５地区で確認した。長径1.4m、短径1.1m、長円形で断面レンズ状となる土坑である。中央に小穴があった。遺物の出土は少量で、弥生土器片（１・２）が出土している。

ＳＫ404　５地区で確認した。長径1.0m以上、短径0.9mの土坑である。遺物の出土は少量で、弥生土器片（３）が出土している。

ＳＫ412　４地区で確認した。長径1.85m、短径



第２図　遺跡地形図（1：5,000）［ 一志町都市計画図　1：2,500 昭和49年より作成 ］



第３図　調査区位置図（1：1,000）

1.25m、不定形の土坑である。ＳＤ409・413と重複し、これらより古い。ほぼ完形の弥生土器鉢（５）、及び壺片（６）や甕片（15）が出土した。これらは底から浮いた状態で、ほぼ同じ高さから出土している。内面に布目のある平瓦（18）が出土したが、この時代の遺物は１点のみであった。他の遺構が重複しているのを確認できずに同時に掘削したため他の時期の遺物が入ってしまったと考えた。

ＳＫ414　４地区で確認した。調査区外に延びるが、長辺1.2m以上、短辺1.1m以上の方形の土坑であろうか。遺物は弥生土器の小片が出土しているのみである。

ＳＫ415　１地区で確認した。調査区外に延びるが、径2.1m程度の円形の土坑であろう。遺物の出土は少量であるが、弥生土器壺片（４）が出土している。

ＳＫ417　１地区で確認した。長辺3.6m、短辺0.65～0.9mの長方形状の土坑である。北辺部付近で、ほぼ完形に復元できる弥生土器壺（19）が出土した。この土器は、遺構底から10㎝ほど浮いた状態で、口縁を下に斜めになった状態で出土した。遺物はこの他にはほとんど出土していない。

小穴・柱穴　５地区中央で弥生時代の小穴・柱穴を集中して確認したが、建物として認識することはできなかった。

（２）奈良時代の遺構

小穴・柱穴　５地区中央で奈良時代の小穴・柱穴を集中して確認したが、建物として認識することはできなかった。Ｂ24Ｐit1からは須恵器杯（46）と土師器杯（47）、Ｂ24Ｐit3からは土師器杯（48）と甕（54）が出土した。

（３）平安時代の遺構

ＳＫ406　５地区北端で確認した。調査区外に延びるが、径1.4m以上で、円形の土坑であろう。ＳＤ403・405と重複し、これらより古い。底部外面に墨書のある土師器杯（30）、平瓦（33・34）等が出土した。弥生土器も出土しているが、混入であろう。

（４）中世の遺構

ＳＤ407　５地区南端で確認した。幅0.45～0.5mの溝である。溝の底は平らで、若干の小穴が見られた。山茶椀（36）が出土した。

ＳＫ408　５地区南端でＳＤ407に隣接して確認した。弥生土器の小片と中世のものと考えられる土師器片が出土した。溝になる可能性もある。

ＳＤ403　５地区北端で確認した。幅0.3～0.45mの溝である。ＳＫ404及びＳＫ406と重複し、これらより新しい。５地区の北面及び東面の断面観察では、溝の埋土は黒褐色系の土で、周囲から下がっているが、溝として独立して確認することができなかった。出土遺物は少量で弥生土器片が多いが、周囲からの混入であろう。溝の方向がＳＤ407や、第２次調査で確認された区画溝と似ていることや断面の状況から中世であると判断した。

ＳＤ405　５地区北端で確認した。ＳＤ403とほぼ並行する。幅0.25～0.3mの溝である。ＳＫ406と重複し、これより新しい。底部外面に墨書のある灰釉陶器杯（41）、軒平瓦（43）等が出土した。溝の方向がＳＤ407や、第２次調査で確認された区画溝と似ていることや断面の状況から中世であると判断した。

（５）時期不明の遺構

ＳＫ401　５地区でＳＫ402に接して確認した。重複関係は確認できなかった。調査区外に延びるが、径1.2m以上の円形の土坑であろう。遺物は弥生土器もしくは土師器の小片が出土しているのみである。

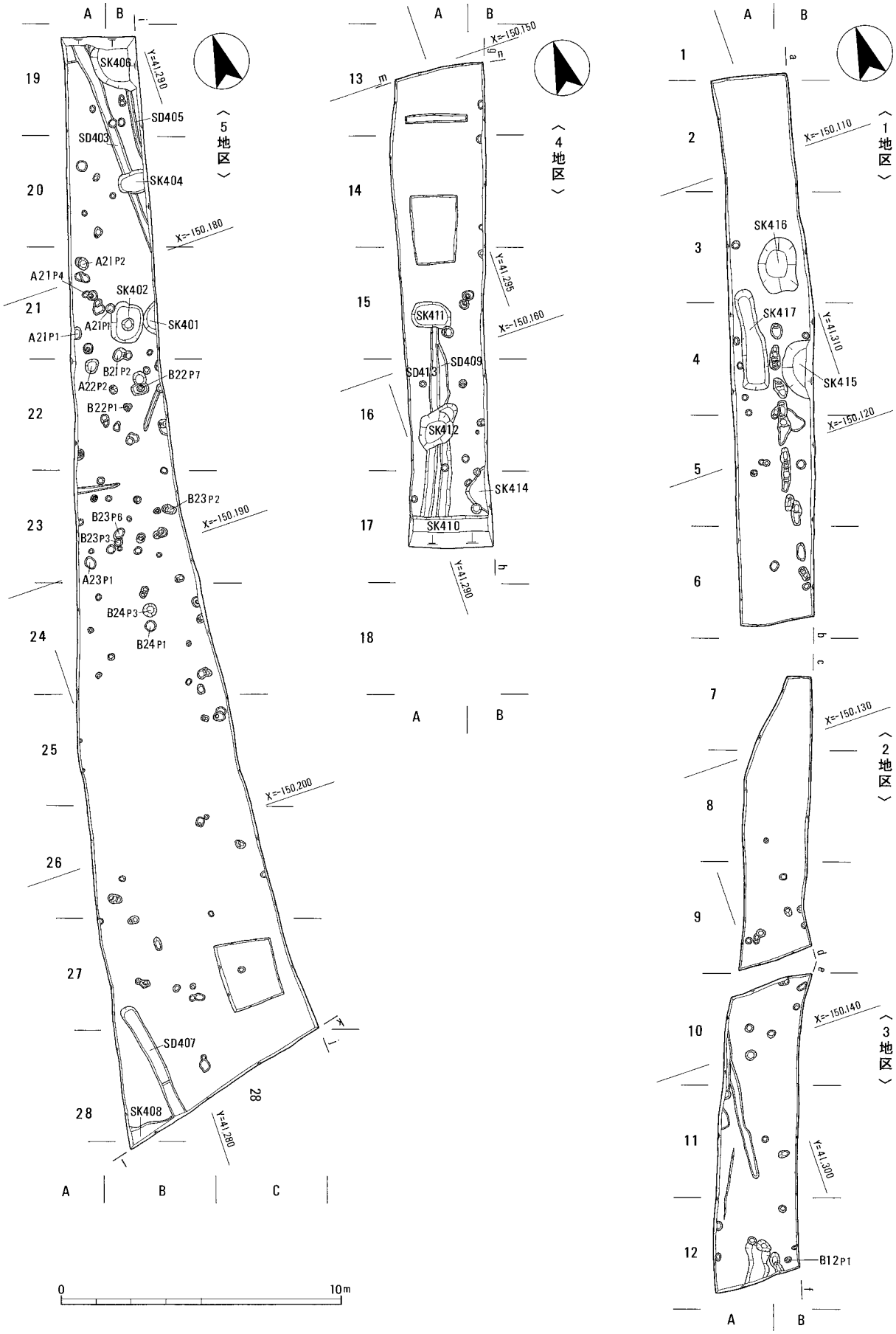
ＳＤ409・413　４地区で確認した。ＳＫ412より後出し、ＳＫ410より古い。遺物は弥生土器が少量出土している。

ＳＫ410　４地区南端で確認した。ＳＤ409・413と重複し、これらより後出する。遺物は弥生土器甕（45）と、弥生土器の底部を利用した加工円盤（44）等が出土している。

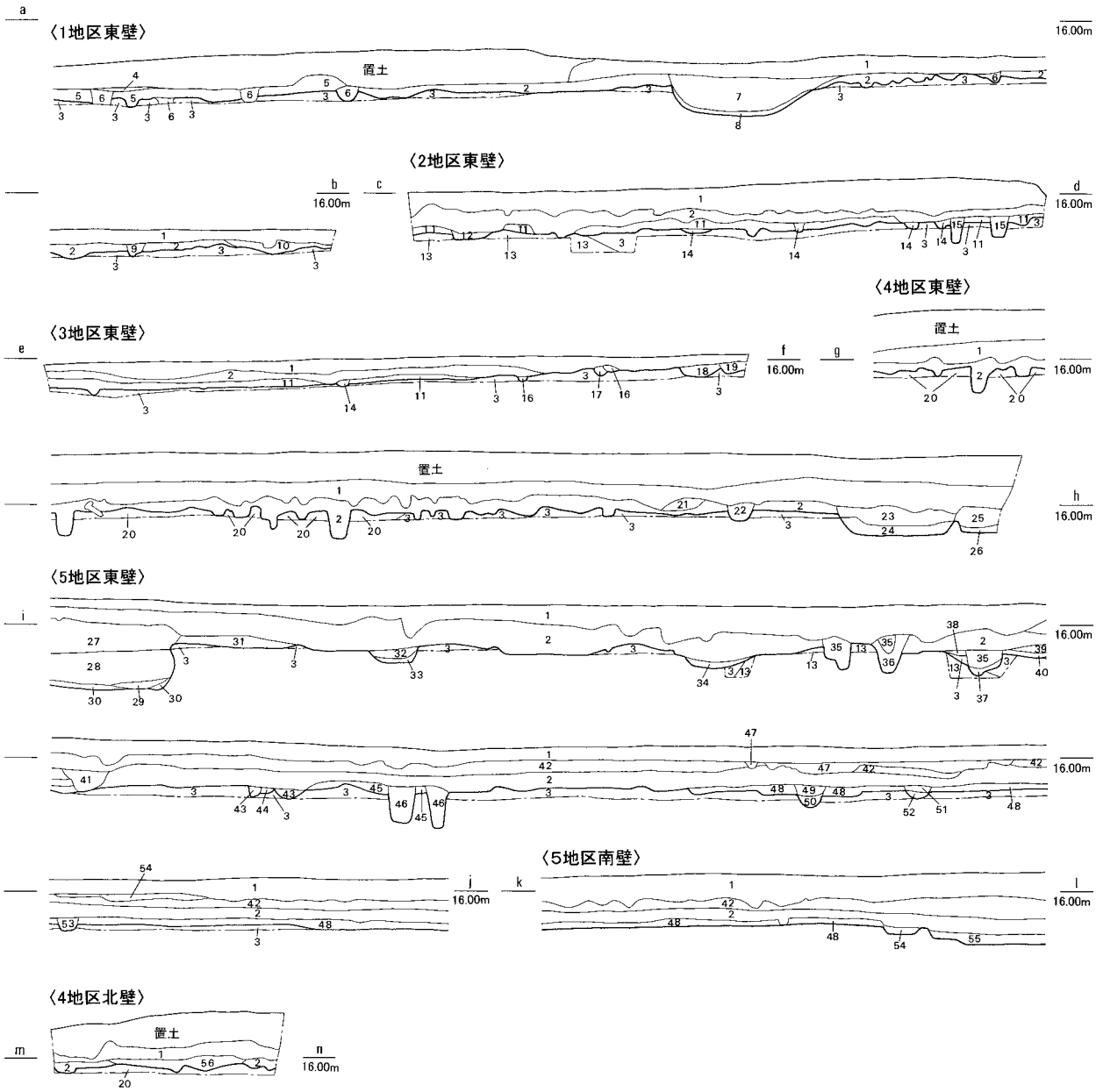
ＳＫ411　４地区で確認した。ＳＤ409・413と接するが、前後関係は確認できなかった。遺物は弥生土器もしくは土師器の小片が出土しているのみである。

ＳＫ416　１地区中央で確認した。遺物は弥生土器もしくは土師器の小片が出土しているのみである。

（西村美幸）

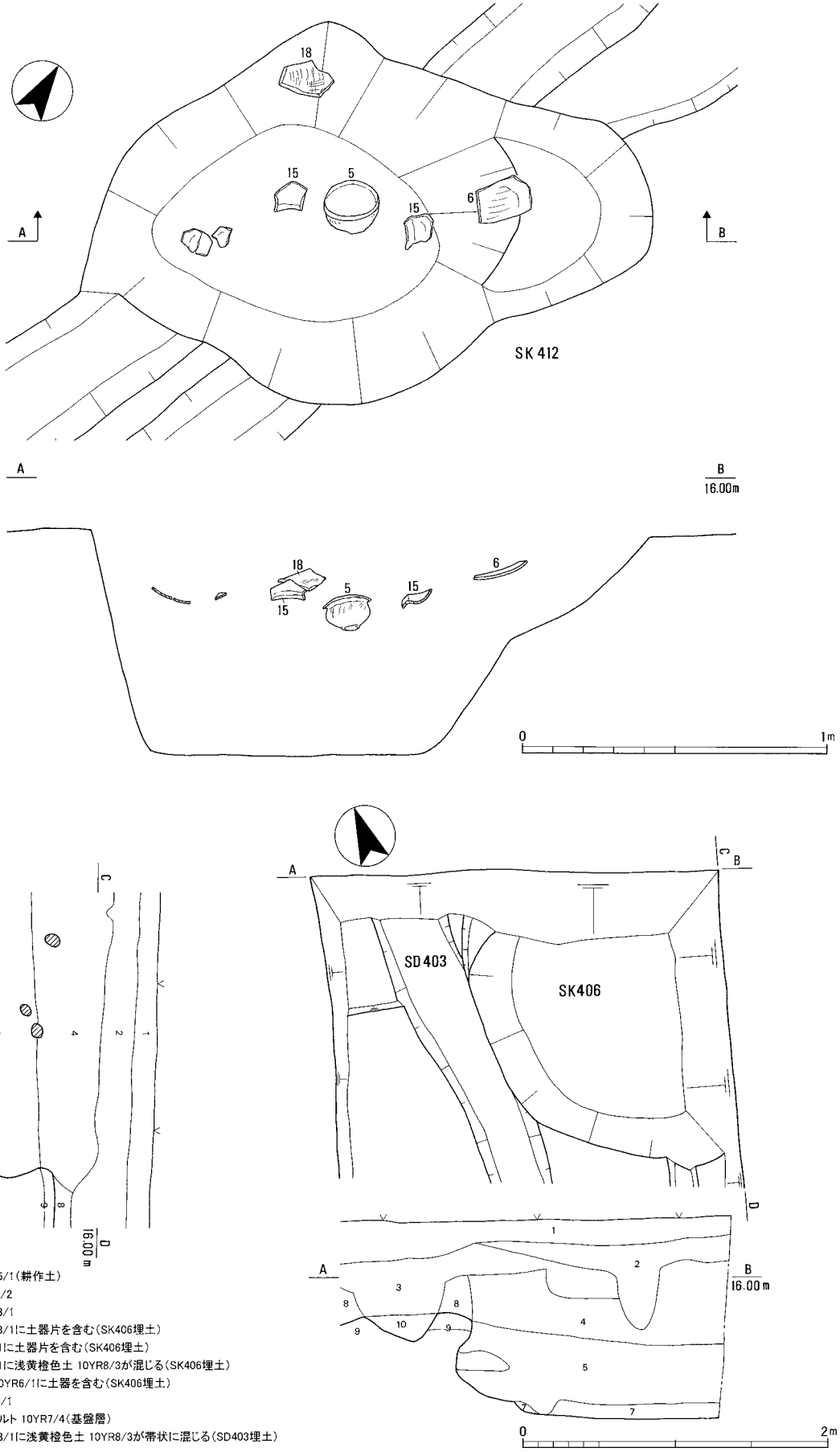


第４図　遺構平面図（1：200）



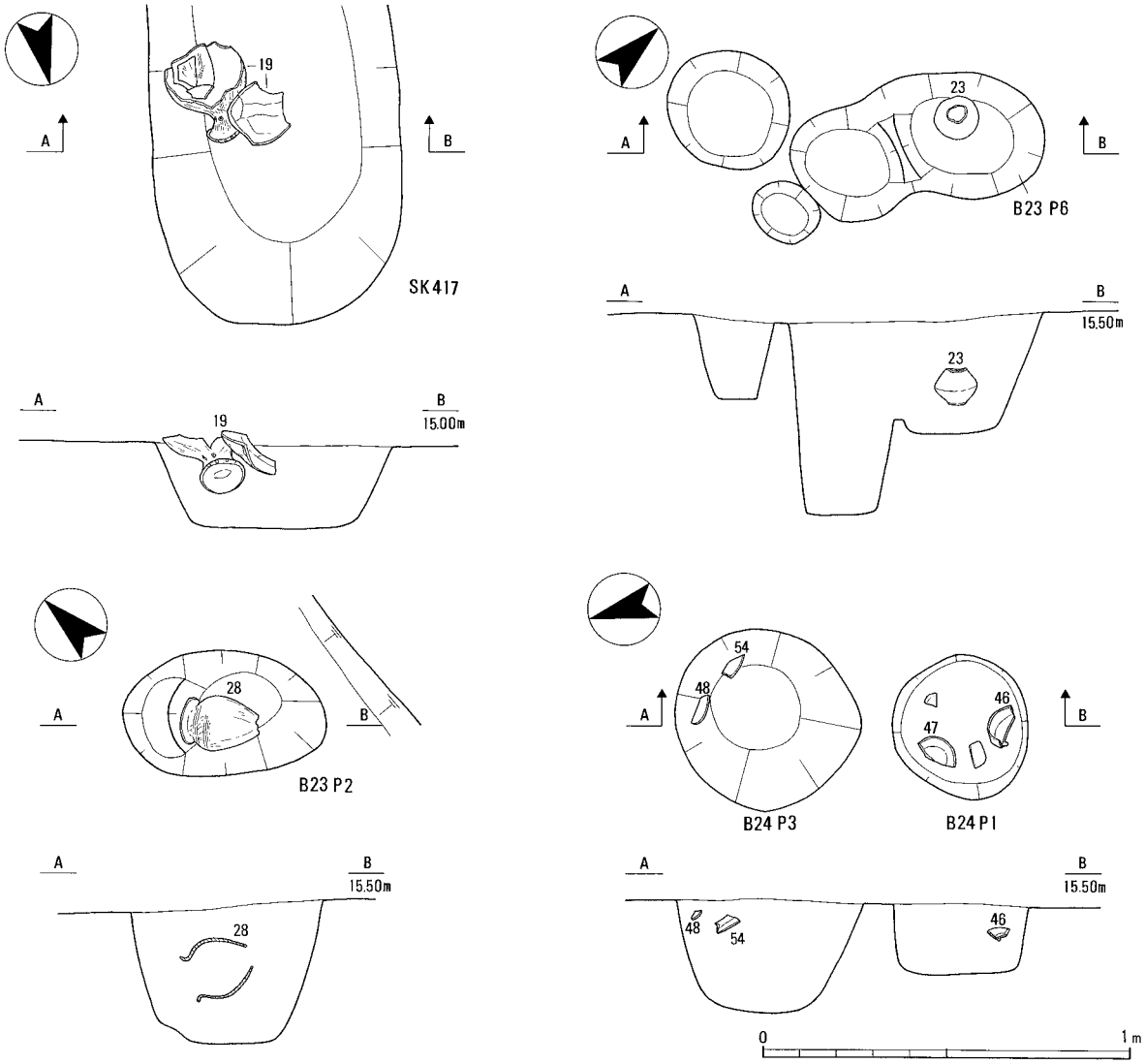
1 褐灰色土 7.5YR5/1、10YR5/1(耕作土)
2 黒褐色土 10YR3/1～3/2
3 にぶい黄橙色シルト 10YR6/4・7/4 明黄褐色シルト 10YR7/6(基盤層)
4 明黄褐色土 10YR7/6
5 黒色土 10YR1.7/1
6 5層に3層がブロック状に混じる
7 黒色土 10YR2/1 (SK415埋土)
8 7層に3層が斑状に混じる(SK415埋土)
9 5層に3層がブロック状に混じる
10 暗褐色土 10YR3/3
11 黒褐色土 10YR3/2 に3層が少し混じる
12 2層に13層が斑状に混じる
13 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/4に橙色礫 7.5YR7/6が混じる(基盤層)
14 11層に3層が斑状に混じる
15 黒褐色土 7.5YR3/1に3層が斑状に混じる
16 黒褐色土 10YR3/2 に3層が少し混じる
17 にぶい黄褐色土 10YR5/3
18 黒褐色土 10YR3/1
19 灰黄褐色土 10YR4/2
20 明黄褐色砂 10YR7/6(基盤層)
21 暗褐色土 10YR3/3
22 黒褐色土 10YR3/1
23 黒褐色土 10YR3/2(SK414埋土)
24 23層に3層が斑状に混じる(SK414埋土)
25 黒色土 10YR2/1(SK410埋土)
26 25層に3層が斑状に混じる(SK410埋土)
27 黒褐色土 7.5YR3/1に土器片を含む(SK406埋土)
28 黒色土 7.5YR2/1に土器片を含む(SK406埋土)
29 黒色土 7.5YR2/1に浅黄橙色土 10YR8/3が混じる(SK406埋土)
30 褐灰色砂質土 10YR6/1に土器を含む(SK406埋土)
31 黒褐色土 10YR3/1
32 黒色土 10YR2/1(SK404埋土)
33 32層に3層が斑状に混じる(SK404埋土)
34 2層に13層が斑状に混じる(SK401埋土)
35 黒褐色土 7.5YR3/1に1cmほどの礫を含む
36 黒褐色土 10YR3/2に1cmほどの礫を含む
37 35層に3層が斑状に混ざる
38 黒褐色土 7.5Y3/1に3層が斑状に混じる
39 黒褐色土 7.5Y3/1に3層が斑状に混じる
40 灰黄褐色シルト 10YR4/2
41 黒褐色土 7.5YR3/1
42 黒褐色土 7.5YR3/2
43 黒褐色土 7.5YR3/1
44 黒褐色土 7.5Y3/1に3層が斑状に混じる
45 黒褐色土 7.5Y3/1に3層が斑状に混じる
46 黒色土 10YR2/1に3層が斑状に混じる
47 灰褐色土 7.5YR5/2(耕作土)
48 黒褐色土 7.5YR2/2
49 黒褐色土 7.5YR1.7/1
50 49層に3層がブロック状に混じる
51 黒褐色土 7.5YR3/1
52 51層に3層が斑状に混じる
53 黒褐色土 7.5YR3/1
54 黒色土 7.5YR2/1に3層が混じる(SD407埋土)
55 黒色土 7.5YR2/1に3層が混じる(SK408埋土)
56 黒色土 10YR2/1に20層が混じる

第５図　土層断面図（1：100）



1　褐灰色土 7.5YR5/1（耕作土）
2　黒褐色土 10YR3/2
3　黒褐色土 7.5YR3/1
4　黒褐色土 7.5YR3/1に土器片を含む（SK406埋土）
5　黒色土 7.5YR2/1に土器片を含む（SK406埋土）
6　黒色土 7.5YR2/1に浅黄橙色土 10YR8/3が混じる（SK406埋土）
7　褐灰色砂質土 10YR6/1に土器を含む（SK406埋土）
8　黒褐色土 10YR3/1
9　にぶい黄橙色シルト 10YR7/4（基盤層）
10　黒褐色土 7.5YR3/1に浅黄橙色土 10YR8/3が帯状に混じる（SD403埋土）

第６図　ＳＫ412遺物出土状況図（1：20）、ＳＫ406・ＳＤ403平面図・土層断面図（1：40）



第７図　ＳＫ417、Pit 遺物出土状況図（1：20）

遺構番号	旧名称	地区	グリッド	方位	規模（m）	時期	備考
ＳＫ401	ＳＫ１	5	B21	－	径 1.2以上、深さ 0.15	不明	
ＳＫ402	ＳＫ２	5	B21	－	長径 1.4、短径 1.1、深さ 0.15	弥生	中央にＳＫ402より古い小穴あり
ＳＤ403	ＳＤ３	5	B20	Ｎ０°	幅 0.35 ～ 0.45、深さ 0.15	中世？	ＳＫ404・406より新しい
ＳＫ404	ＳＫ４	5	B20	－	長径 1.0以上、短径 0.9、深さ 0.2	弥生	
ＳＤ405	ＳＤ５	5	B19	Ｎ７°Ｅ	幅 0.25 ～ 0.3、深さ 0.05	中世？	ＳＫ406より新しい
ＳＫ406	ＳＫ６	5	B19	－	径 1.4以上、深さ 0.6	平安	
ＳＤ407	ＳＤ７	5	B28	Ｎ８°Ｗ	幅 0.45 ～ 0.5、深さ 0.1 ～ 0.15	中世	
ＳＫ408	ＳＫ８	5	B28	－	長辺 1.5以上、短辺0.6以上、深さ 0.25	中世	溝の可能性あり
ＳＤ409	ＳＤ９	4	A16,A17	N21°Ｅ	幅 0.3 ～ 0.4、深さ 0.1	不明	ＳＫ412・ＳＤ413より新しい
ＳＫ410	ＳＫ10	4	B17	Ｅ19°Ｎ	幅 5.5以上、深さ 0.2	不明	ＳＤ409・413より新しい
ＳＫ411	ＳＫ11	4	A15	－	長径 1.4、短径 0.9、深さ 0.15	不明	
ＳＫ412	ＳＫ12	4	A16	－	長径 1.85、短径 1.25、深さ 0.7 不定形	弥生	ＳＤ409・413より古い
ＳＤ413	ＳＤ13	4	A16,B16	N22°Ｅ	幅 0.25 ～ 0.4、深さ 0.1	不明	ＳＫ412より新しい・ ＳＤ409より古い
ＳＫ414	ＳＫ14	4	B17	－	長辺 1.2以上、短辺1.1以上、深さ 0.2	弥生	
ＳＫ415	ＳＫ15	1	B4	－	径 2.1、深さ 0.4	弥生	
ＳＫ416	ＳＫ16	1	A3,B3	－	長径 2.0、短径 1.35、深さ 0.35	不明	
ＳＫ417	ＳＫ17	1	A3,A4	－	幅 0.65 ～ 0.9、深さ 0.3、長さ 3.6	弥生	墓の可能性あり

第１表　遺構一覧表（遺構番号は、過去の調査との重複を避けるため、401番から始まっている）

第４章　遺　物

１　弥生時代の遺構出土の遺物

ＳＫ402出土遺物（１・２）

１は弥生土器壺の頸部、２は甕片である。１の外面は、簾状文が施されている。土器の時期は、上村氏による伊勢地域の弥生土器編年の伊勢Ⅳ様式の範疇に収まろう。

ＳＫ404出土遺物（３）

３は口縁端部に刻み目が施されている。遺物の出土は少量である。

ＳＫ415出土遺物（４）

４は流水文が施されている。他の遺構出土のものより若干古く位置づけられよう。

ＳＫ412出土遺物（５～18）

５・６・15は遺構底面から40cmほど浮いた状態で出土した。５はほぼ完形で少し傾いた正位状態であったが、６・15は破片で、15は２片が離れた場所から出土した。18は内面に布目を持つ瓦である。他の弥生土器とは少し離れて出土したが、出土した高さはほぼ同一である。この時期の遺物が他にないため、重複していた他の遺構を区別できずに一緒に掘削してしまったものと考えた。

弥生土器は、伊勢Ⅳ－１～２様式を中心とした時期のものである。壺は口縁端部を拡張させ、刻み目を施したもの（７・８・10)、凹線文を施したもの（９・11）がある。６は大型の壺の体部で、ヘラ描斜格子文、櫛描直線文・波状文が施されている。他のものより若干古く位置づけられよう。５は口縁部を上下に拡張させた鉢でやや上につまみ上げている。弥生土器甕は外面を縦方向のハケメ、口縁端内面を横方向のハケメで調整し、口縁端部に刻み目が施されている。

ＳＫ417出土遺物（19）

19は伊勢Ⅳ－１の広口壺で、口縁部内面と端部及び頸部に浮文が施されている。体部は丸みをもつもので、凹線文系の土器群に対して在地系の土器と位置づけられるものに該当しよう。

小穴・柱穴出土遺物（20～28）

５地区の中央部を中心として、柱穴が集中している。この柱穴から弥生時代の遺物が出土した。いずれも概ね伊勢Ⅳ様式に位置づけられよう。

20は有茎の石鏃で、先端部と茎部が少し欠けている。21・22は凹線文が施された壺、23は小型の壺で、口縁部を欠くが、算盤玉状の体部が特徴的である。穴の底から少し浮いて、正位で出土した。28の甕は底部が欠けている。穴の底から少し浮いて横倒しとなって出土した。

２　その他の遺構出土の遺物

ＳＫ406出土遺物（29～35）

29は弥生土器壺で、受け口状の口縁部をもち伊勢Ⅳ－１様式ごろのものと考えられる。混入であろう。30は平安時代前期の土師器杯である。底部外面に墨書が施されている。文字は、「ひとやね」に「一」が書かれている。この下部に他の画がないか赤外線で確認したが、これ以外は確認できなかった。31は灰釉陶器の杯で底部外面に薄く墨が見えるが、何が書かれているのか確認できなかった。内面に布目を持つ瓦（33・34）や砥石（35）も出土している。

ＳＤ407出土遺物（36）

36は山茶椀である。底部を欠くが、藤澤氏による編年の第５型式であろうか。

ＳＤ403出土遺物（37）

遺物の出土は少量で、図化できたものは弥生土器壺の頸部（37）のみであった。

ＳＤ409出土遺物（38）

遺物の出土は少量で、図化できたものは口縁端部に刻み目が施された弥生土器甕（38）のみであった。

ＳＤ413出土遺物（39・40）

遺物の出土は少量で、図化できたものは弥生土器のみであった。39は口縁端部に凹線文が施されている。小片だが、径が大きいと考えられるため高杯とした。

ＳＤ405出土遺物（41～43）

41は灰釉陶器の杯である。底部外面に墨書が施されている。墨跡が薄く、赤外線でもあまりはっきりとは写らなかった。２文字あり、上の字は、「賣」もしくは「實」の可能性がある。下の字は「万」であ

ろう。42は須恵器の甕片である。43は、重弧文の軒平瓦である。

ＳＫ410出土遺物（44・45）

44は弥生土器の底部であるが、周囲が打ち欠かれている。後世に加工円盤として利用されたものであろうか。内外面に焼成後に穴を開けた痕跡があるが、穴の位置はそろわず、貫通していない。45は弥生土器甕の口縁部である。

小穴・柱穴出土遺物（46～54）

５地区の中央部を中心として、奈良時代の遺物が出土する柱穴が集中しているが、建物として確認することはできなかった。46・47は同一の穴から出土した。隣接する穴から48・54が出土している。いずれも、奈良時代中葉に位置づけられよう。

３　包含層等出土の遺物（55～64）

包含層からは、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。

55は、細頸壺である。今回の調査では図化できる細頸壺はこの１点のみであった。56は弥生土器甕の底部であろうか。若干上げ底となっている。58・59は須恵器蓋と杯で、奈良時代のものであろう。61は土師器杯で、平安時代中ごろのものであろう。64は土師器茶釜で把手の中央に穴があく。室町時代ごろの中北勢のものである。　（西村美幸）

〔註〕

遺物の年代等に関しては、以下の文献を参考にした。

・　弥生土器：上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社　2002年

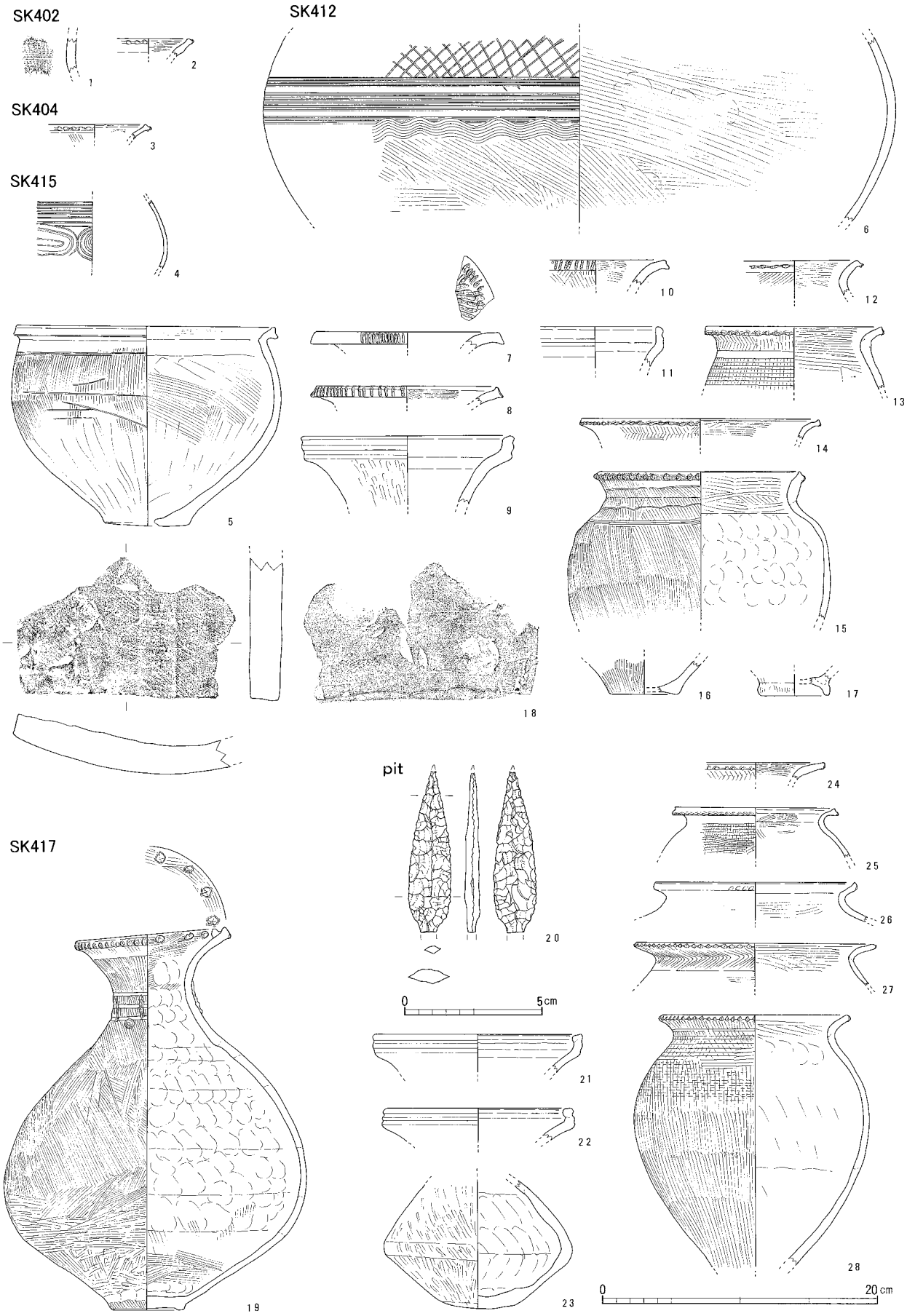
・　陶器（山茶椀）：藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要　第３号』三重県埋蔵文化財センター　1994年

番号	実測番号	様・質	器種など	地区	グリッド	遺構・層名等	大きさ(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調		残存度	特記事項
1	004-02	弥生土器	壺	5	B21	ＳＫ402		外；簾状文 内；ナデ	やや密	外；橙 内；にぶい黄橙	5YR6/6 10YR7/4	小片	
2	004-01	弥生土器	甕	5	B21	ＳＫ402		外；(口縁部) ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ	密	外；橙 内；にぶい橙	5YR6/6 7.5YR7/4	小片	
3	004-03	弥生土器	甕	5	B20	ＳＫ404		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ	やや密	外；灰黄褐 内；にぶい黄橙	10YR4/2 10YR6/3	小片	
4	006-03	弥生土器	壺	1	B4	ＳＫ415		外；半裁竹管文（直線文、流水文） 内；摩耗のため不明	密	外；にぶい黄橙 内；灰白	10YR7/3 2.5Y7/1	小片	
5	002-01	弥生土器	鉢	4	A16	ＳＫ412	（口）19.1 （高）14.6	外；(体上部) ハケメ、(体下部) ケズリ 内；(体上部) ハケメ、(体下部) ナデ	やや密	橙	7.5YR6/6	体部ほぼ完存	
6	016-01	弥生土器	壺	4	A16	ＳＫ412		外；ハケメ→櫛描直線文・波状文、格子文 内；ハケメ	密	外；にぶい橙 内；浅黄	7.5YR7/4 2.5Y7/3	小片	
7	014-03	弥生土器	広口壺	4	A16	ＳＫ412	（口）14.0	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ヨコナデ→刺突文	密	外；にぶい褐 内；灰褐	7.5Y5/3 7.5Y4/2	口縁部1/12	
8	014-08	弥生土器	広口壺	4	A16	ＳＫ412	（口）14.0	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部2/12	
9	010-01	弥生土器	広口壺	4	A16	ＳＫ412	（口）15.4	外；(口縁部) ミガキ→ヨコナデ→端部に凹線文 内；(口縁部) ヨコナデ	やや粗	にぶい褐	7.5YR5/3	口縁部2/12	
10	014-07	弥生土器	広口壺	4	A16	ＳＫ412		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄褐	10Y7/3	小片	
11	014-04	弥生土器	広口壺	4	A16	ＳＫ412		外；(口縁部) ヨコナデ→凹線文 内；(口縁部) ヨコナデ	密	にぶい褐	7.5YR6/3	小片	
12	014-06	弥生土器	甕	4	A16	ＳＫ412		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ	密	灰褐	7.5Y5/2	小片	
13	010-03	弥生土器	甕	4	A16	ＳＫ412	（口）13.0	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ	密	にぶい褐	7.5Y5/3	口縁部2/12	
14	010-02	弥生土器	甕	4	A16	ＳＫ412	（口）17.2	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ	密	外；褐灰 内；にぶい褐	7.5Y4/1 7.5Y5/4	口縁部2/12	
15	015-01	弥生土器	甕	4	A16	ＳＫ412	（口）15.3	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目、(体部) オサエ 内；(口縁部) ハケメ、(体部) ハケメ	やや密	外；黒褐 内；灰黄褐	10YR3/1 10YR4/2	口縁部6/12	
16	014-05	弥生土器	甕	4	A16	ＳＫ412	（底）5.0	外；(底部) ハケメ、底ナデ 内；(底部) ナデ、オサエ	密	外；にぶい黄褐 内；にぶい褐	10YR5/3 7.5YR6/3	底部5/12	
17	014-02	弥生土器	甕	4	A16	ＳＫ412	（底）4.8	外；(底部) ハケメ、底ナデ 内；(底部) ナデ、オサエ	密	外；にぶい橙 内；にぶい橙	7.5Y7/4 7.5Y5/2	底部4/12	
18	008-01	瓦	平瓦	4	A16	ＳＫ412		凹面；布目痕 凸面；ケズリ	やや密	にぶい黄橙	10YR7/4	小片	
19	003-01	弥生土器	広口壺	1	A3	ＳＫ417	（口）11.3 （高）27.7 （底）5.0	外；(体上部) ハケメ、口縁部と頸部に浮文貼り付け (体下部) ハケメ→ミガキ 内；ハケメ→オサエ、口縁部に浮文貼り付け	密	にぶい橙	7.5Y7/4 7.5YR6/4	ほぼ完存	口縁部内外面、頸部に棒状及び輪状の浮文を施す
20	001-01	石製品	石鏃	5	A23	pit1	（長）5.85 （幅）1.5 （厚）0.6	打製、先端部・茎部欠損	－	－	－		サヌカイト。重量4.65ｇ
21	011-06	弥生土器	広口壺	5	B22	pit1	（口）15.2	外；(口縁部) ハケメ？→ヨコナデ→凹線文 内；(口縁部) ヨコナデ	やや粗	にぶい赤褐	5YR5/4	口縁部2/12	
22	011-04	弥生土器	広口壺	5	B21	pit2	（口）14.0	外；(口縁部) ハケメ？→ヨコナデ→凹線文 内；(口縁部) ヨコナデ	やや密	外；にぶい褐 内；橙	7.5YR6/3 2.5YR6/6	口縁部2/12	49も同一ピットから出土
23	009-02	弥生土器	壺	5	B23	pit6	（底）5.4 （体部最大）13.6	外；ミガキ、(底部) ナデ 内；ナデ	密	にぶい褐	7.5YR5/3 7.5YR6/3	底部完存	外面に煤が付着

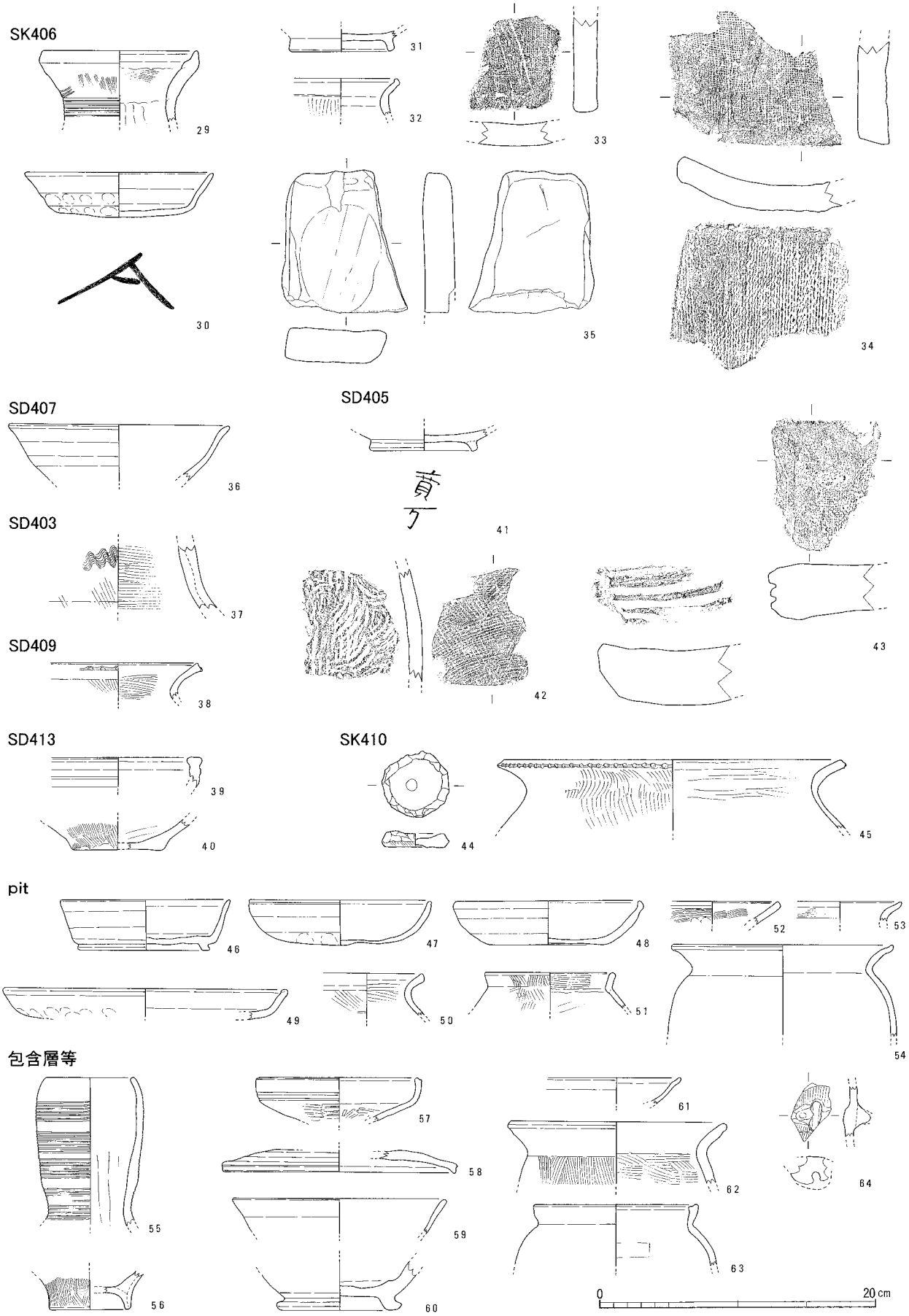
第２表　出土遺物観察表（１）

番号	実測番号	様・質	器種など	地区	グリッド	遺構・層名等	大きさ(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調		残存度	特記事項
24	010-07	弥生土器	甕	5	A21	pit1		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ	密	外；橙 内；褐灰	2.5YR6/6 7.5YR4/1	小片	52も同一ピットから出土
25	010-08	弥生土器	甕	5	A21	pit2	(口) 12.0	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部2/12	
26	010-05	弥生土器	甕	3	B12	pit1	(口) 14.8	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部1/12	
27	011-03	弥生土器	甕	5	A22	pit2	(口) 17.6	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ	密	外；褐灰 内；にぶい褐	7.5YR4/1 7.5YR5/3	口縁部2/12	
28	009-01	弥生土器	甕	5	B23	pit2	(口) 13.8	外；ハケメ、(口縁部) ヨコナデ→端部に刻み目 内；工具ナデ、(口縁部) ハケメ	やや密	にぶい橙	7.5YR6/3	口縁部完存	外面に煤が厚く付着
29	004-05	弥生土器	壺	5	B19	S K406	(口) 11.6	外；(口縁部) ハケメ→ナデ、(頸部) 直線文 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ (頸部) シボリ、ナデ	やや密	にぶい黄橙	10YR7/3 10YR7/4	口縁部4/12	
30	004-06	土師器	杯	5	B19	S K406	(口) 13.7 (高) 3.2	外；ナデ、(口縁部) ヨコナデ 内；オサエ・ナデ、(口縁部) ヨコナデ	やや粗	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部11/12	底部外面に墨書あり
31	004-04	灰釉陶器	杯	5	B19	S K406	(高台) 7.6	外；回転ナデ、高台貼付 内；ナデ	密	外；黄灰 内；にぶい黄橙	2.4Y6/1 10YR7/3	高台部5/12	
32	006-02	土師器	甕	5	B19	S K406		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ 内；(口縁部) ヨコナデ	やや粗	外；にぶい褐 内；灰褐	7.5YR6/3 7.5YR5/2	小片	
33	005-02	瓦	不明	5	B19	S K406		凹面；布目痕 凸面；ケズリ	やや密	浅黄橙	10YR8/3	小片	
34	005-01	瓦	平瓦	5	B19	S K406		凹面；布目痕 凸面；縄タタキ	やや粗	黄灰	2.5Y5/1	小片	
35	005-03	石製品	砥石	5	B19	S K406	(長) 10.3 (幅) 9.1 (厚) 2.2	3面に研痕あり	－	－	－	両端欠	砂岩系、重量325g
36	007-06	陶器	山茶椀	5	B28	S D407	(口) 16.0	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	黄灰	2.5Y6/1	口縁部2/12	
37	007-03	弥生土器	壺	5	A19	S D403		外；ハケメ、波状文 内；ハケメ	密	にぶい黄褐	10YR5/3	小片	
38	007-02	弥生土器	甕	4	A16	S D409		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ	やや密	外；灰黄褐 内；にぶい黄橙	10YR4/2 10YR6/4	小片	
39	007-01	弥生土器	高杯	4	A16	S D413		外；(口縁部) ヨコナデ→凹線文 内；(口縁部) ヨコナデ	やや密	橙	7.5YR6/6	小片	
40	007-04	弥生土器	壺	4	A16	S D413	(底) 6.7	外；ハケメ、ナデ 内；工具ナデ	密	にぶい黄橙	10YR6/4	底部3/12	
41	007-05	灰釉陶器	杯	5	B19	S D405	(高台) 7.8	外；回転ナデ、高台貼付 内；ナデ	密	外；灰黄 内；にぶい黄	2.5Y7/2 2.5Y6/3	高台部5/12	底部外面に墨書あり
42	007-07	須恵器	甕	5	B19	S D405		外；タタキ目 内；あて具痕	密	灰	7.5Y6/1	小片	
43	008-02	瓦	軒平瓦	5	B19	S D405		凹面；布目痕 凸面；ケズリ	やや密	にぶい黄橙	10YR7/5	小片	重弧文
44	006-04	弥生土器	甕	4	B17	S K410	(底) 4.8	外；ハケメ 内；ナデ	密	にぶい褐	7.5YR6/3	底部完存	加工円盤として再利用か 内外面に穴を開けかけた痕跡あり
45	006-01	弥生土器	甕	4	B7	S K410	(口) 25.4	外；(口縁部) ナデ→端部に刻み目 内；(口縁部) ハケメ	密	にぶい赤褐	5YR5/3	口縁部1/12	外面に煤付着か
46	012-01	須恵器	杯	5	B24	pit1	(口) 12.2 (高) 3.7 (高台) 9.5	外；回転ナデ、高台貼付、底部に工具痕 内；回転ナデ	密	黄灰	2.5Y6/1	口縁部6/12	
47	012-02	土師器	杯	5	B24	pit1	(口) 13.2 (高) 3.3	外；(口縁部) ヨコナデ、(体部) オサエ、ナデ 内；(口縁部) ヨコナデ、(体部) オサエ、ナデ	やや密	外；橙 内；明赤褐	5YR6/6 5YR5/6	口縁部3/12	
48	012-03	土師器	杯	5	B24	pit3	(口) 13.75 (高) 3.2	外；(口縁部) ヨコナデ、(体部) オサエ、ナデ 内；(口縁部) ヨコナデ、(体部) オサエ、ナデ	やや密	外；にぶい黄橙 内；にぶい黄橙	10YR7/3 10YR6/3	口縁部2/12	
49	011-02	土師器	皿	5	B21	pit2	(口) 20.6	外；(口縁部) ヨコナデ 内；(口縁部) ヨコナデ、(底部) ケズリ、オサエ	密	外；橙 内；にぶい黄橙	5YR6/6 10YR7/3	口縁部2/12	22も同一ピットから出土
50	011-05	土師器	甕	5	B22	pit7		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	10YR7/3	小片	
51	011-07	土師器	甕	5	B23	pit3	(口) 9.5	外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ、(体部) ハケメ 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ、(体部) ナデ	密	橙	5YR6/6	口縁部2/12	
52	010-06	土師器	甕	5	A21	pit1		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ 内；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ・オサエ	密	にぶい黄橙	10YR7/4	小片	24も同一ピットから出土
53	011-01	土師器	甕	5	A21	pit4		外；(口縁部) ハケメ→ヨコナデ 内；(口縁部) 摩耗のため不明	やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	小片	
54	012-04	土師器	甕	5	B24	pit3	(口) 16.0	外；(口縁部) ヨコナデ、(体部) 摩耗のため不明 内；(口縁部) ヨコナデ、(体部) 摩耗のため不明	やや密	橙	7.5YR7/6	口縁部2/12	
55	013-05	弥生土器	細頸壺	1	－	表土	(口) 6.6	外；(口縁部) ヨコナデ→櫛描直線文 内；(口縁部) ナデ→ヨコナデ、シボリ痕	やや密	浅黄	2.5Y7/3	口縁部2/12	
56	013-04	弥生土器	甕	5	－	表土	(底) 5.9	外；(底部) ハケメ、底貼り付けナデ 内；(底部) ナデ	やや密	にぶい黄褐	10Y5/3	底部1/12	
57	013-03	弥生土器	壺	5	－	表土	(口) 12.0	外；(口縁部) ミガキ？→ヨコナデ→凹線文 内；(口縁部) ミガキ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部1/12	
58	013-02	須恵器	杯蓋	5	B18	包含層	(口) 17.0	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	黄灰	2.5Y5/1	口縁部1/12	
59	012-05	須恵器	杯	5	－	包含層	(口) 15.4	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	黄灰	2.5Y5/1	口縁部2/12	
60	013-01	灰釉陶器	壺	5	－	表土	(高台) 9.0	外；回転ナデ、高台貼付、底部ナデ 内；回転ナデ	やや密	外；淡黄 内；淡黄	2.5Y8/3 2.5Y7/3	高台部3/12	
61	012-07	土師器	杯	5	B18	包含層		外；(口縁部) ヨコナデ、(体部) ナデ 内；(口縁部) ヨコナデ、(体部) 摩耗のため不明	やや密	外；にぶい黄 内；灰黄褐	2.5Y6/ 10YR5/1	小片	
62	012-06	土師器	甕	5	－	表土	(口) 15.8	外；(口縁部) ヨコナデ、(体部) ハケメ 内；(口縁部) ヨコナデ、(体部) ハケメ	やや密	外；にぶい黄橙 内；にぶい黄橙	10YR6/1 10YR5/1	口縁部1/12	
63	012-08	土師器	甕	4	－	表土	(口) 11.9	外；(口縁部) ヨコナデ、(体部) 摩耗のため不明 内；(口縁部) ヨコナデ、(体部) 工具ナデ	やや密	橙	7.5YR6/6	口縁部1/12	
64	013-06	土師器	茶釜	5	－	表土		外；(口縁部) ハケメ、把手貼り付け 内；(口縁部) ナデ	やや密	にぶい黄橙	10YR6/4	小片	

第３表　出土遺物観察表（２）



第８図　出土遺物実測図（１）（1：4、ただし20は1：2）



第９図　出土遺物実測図（２）（1：4）

第５章　調査のまとめ

今回の調査では、細長い調査区ではあったが、以下のことが確認できた。

１　弥生土器の特徴について

今回の調査箇所から確認できた弥生土器は、概ね伊勢Ⅳ－１～２様式[①]の範疇に位置づけられるものである。

広口壺は、凹線文系のもの（９・11・21・22・39・57)、在来系のもの（７・８・10・19）がある。在来系のものは、19にみられるように口縁部から頸部にかけて浮文を施し、体部が丸みをおびるなど、在地色の強さを示している。また、今回の調査では、細頸壺は１点出土したのみであった。

甕は、ほとんどの個体において体部外面に縦方向のハケメ、内部にナデやオサエ調整が、口縁部内面には横方向のハケメが施されている。口縁部端部は刻み目が施され、頸部には平行線が描かれている。器形は、体部上半が最大径となるもの、口縁部径と類似するものなどがある。

これらの概要は、第２次調査の土器の様相と類似している。

２　鳥居本遺跡の遺構変遷について

今回の調査は細長く、遺跡の特徴をつかむことができなかったので、近接する第２・３次調査の成果[②]と関連づけて遺構の変遷を考えたい。

（１）弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、第２次調査では調査区の北端付近で方形周溝墓が２基、中央部付近で竪穴住居１棟が確認されている。このほか、方形周溝墓周辺や竪穴住居周辺に集中して土坑が確認された。

今回の第４次調査で確認された弥生時代の遺構は、ほぼ完形の壺が出土した長方形の土坑ＳＫ417とＳＫ415が北端の１地区にある他は、４地区の南端から５地区中央部までの間に集中している。建物跡などは確認できなかったが、遺構の集中具合は第２次調査と似た傾向を示している。第２次調査箇所と今回の調査箇所の間には谷などの地理的に隔てるものもなく、また遺物の特徴から見てもよく似た様相を示していることより、一連の土地利用がなされていたと考えることができよう。

（２）飛鳥・奈良時代の遺構

飛鳥・奈良時代の遺構は、第２・３次調査では調査区北部から中央部を中心にあまり集中せずに確認されている。第４次調査では、飛鳥・奈良時代の遺構は少なく、５地区中央部で小穴が確認できたのみである。これらの小穴は直径40～50㎝と大きいものもあり、図化のできる土器が数点出土している。近くが居住域として利用されていた可能性が高いと考えられる。

（３）平安時代の遺構

平安時代の遺構は、第２次調査では調査区中央部に掘立柱建物が確認され、周辺で井戸が確認されている。第４次調査では５地区の北端で土坑１基が確認できたのみであった。

（４）中世の遺構

中世の遺構は、第２・３次調査では調査箇所全体で区画溝が確認されている。第４次調査では、ＳＤ403・405・407、ＳＫ408がこの時期の遺構と考えた。これらの溝の方角は、第２・３次調査で確認された溝の方向と概ね類似しており、屋敷の区画の一部である可能性が考えられる。

３　まとめ

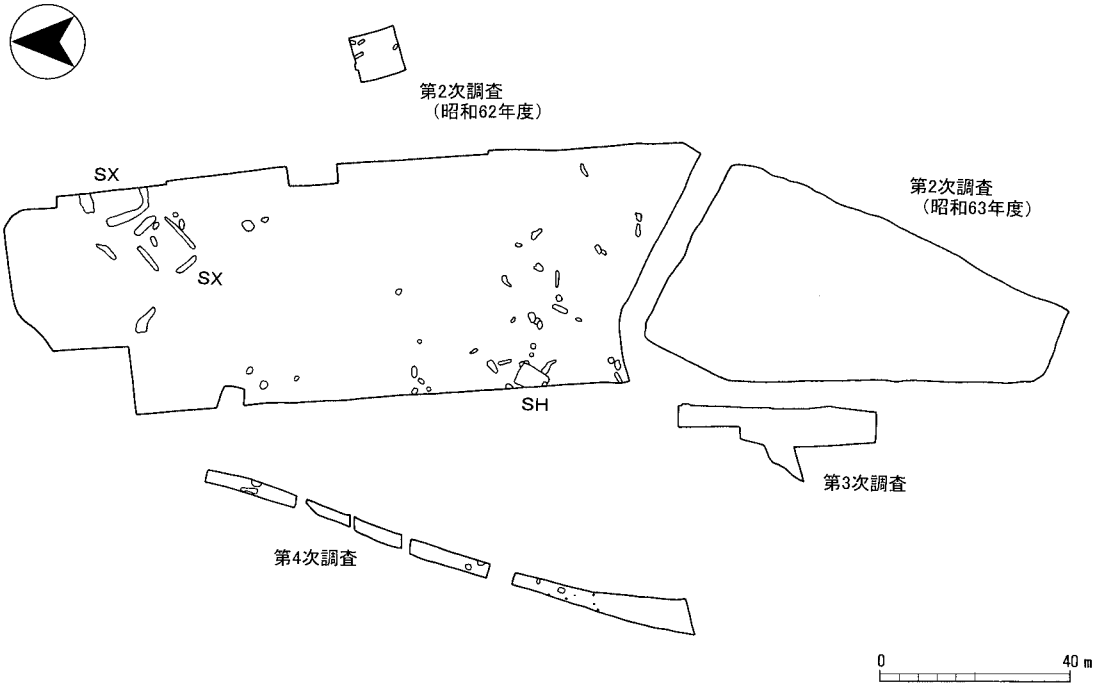
鳥居本遺跡の第４次調査では、鳥居本遺跡の中央部を確認した。遺構・遺物は少量であったが、第２・３次調査で確認された土地利用の延長上にあることが確認できた。　（西村美幸）

〔註〕

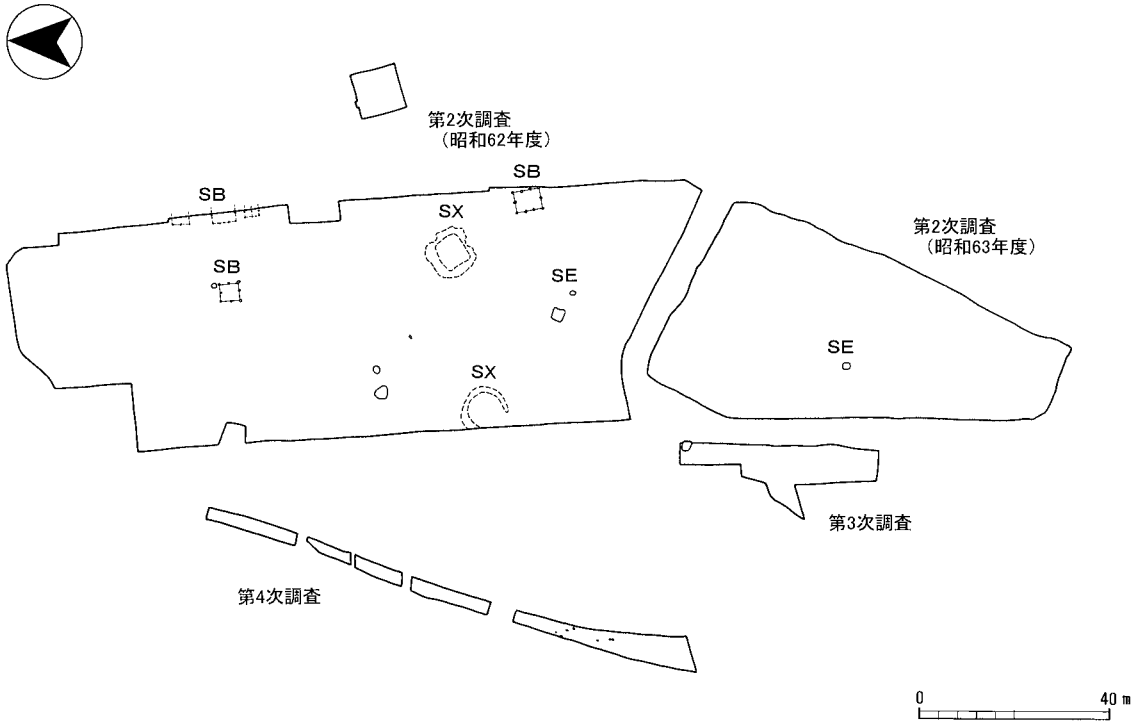
① 上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年－東海編－』株式会社木耳社　2002年

② 「一志郡一志町小山　鳥居本遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊５－』三重県教育委員会　1991年、『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊10－』三重県教育委員会　1991年、『鳥居本遺跡第三次調査報告』一志町教育委員会　1992年

＜弥生時代＞

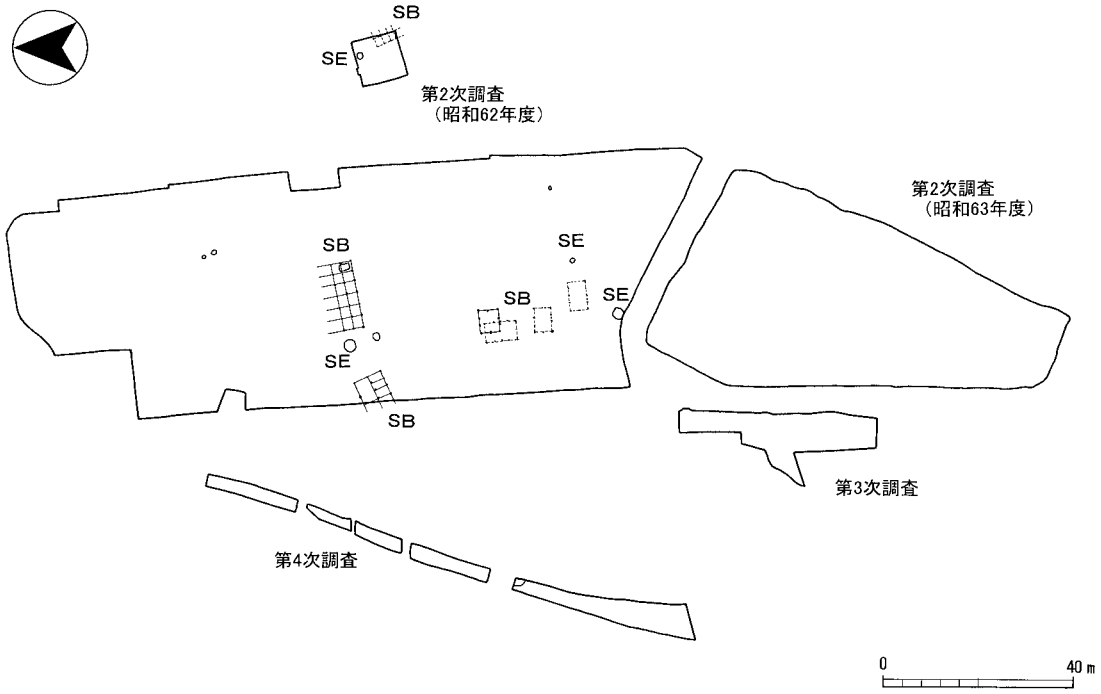


＜飛鳥・奈良時代＞

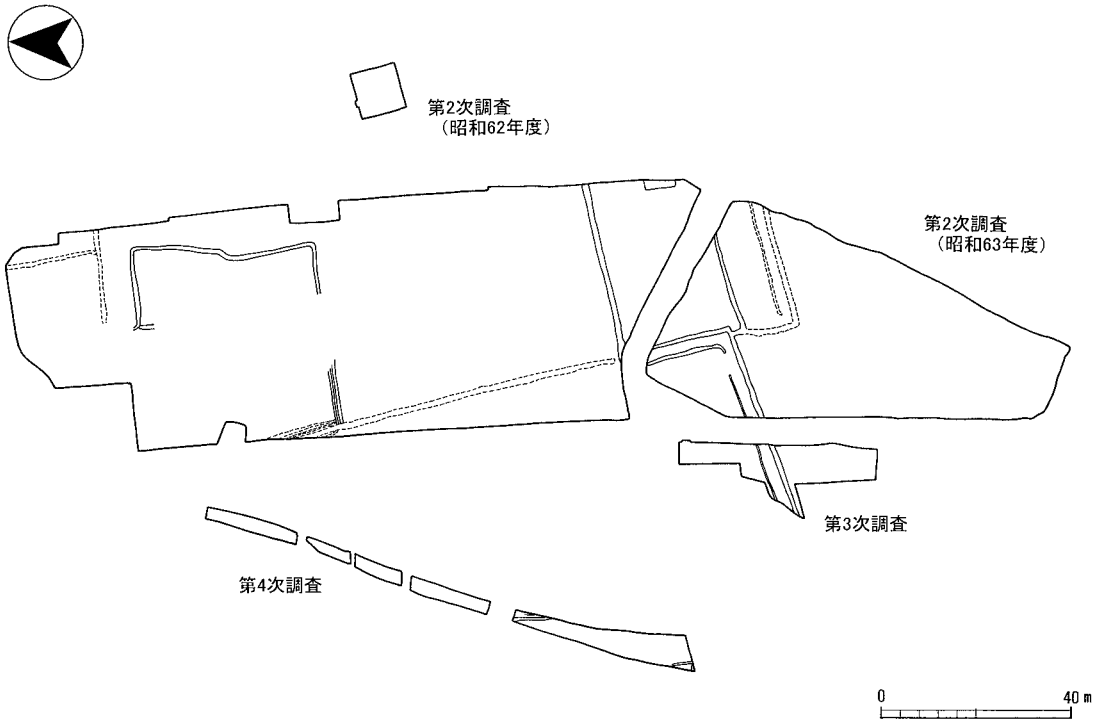


第10図　鳥居本遺跡（第２～４次）遺構の変遷（１）（1：1,600）（破線は時期が確定できない遺構）

＜平安時代＞



＜中世＞



第11図　鳥居本遺跡（第２～４次）遺構の変遷（２）（1：1,600）（破線は時期が確定できない遺構）

調査区全景（南から）

写真図版２

調査前風景（南から）

工事終了後風景（南から）

１地区中心部（北から）

２・３地区全景（北から）

写真図版４

４地区南半（南から）

５地区全景（北から）

５地区北半（北から）

５地区中心部（南から）

写真図版６

ＳＫ412遺物出土状況（南から）

ＳＫ417遺物出土状況（北から）

弥生土器甕（28）出土状況（北東から）

弥生土器壺（23）出土状況（南東から）

写真図版８

須恵器杯（46）出土状況（南から）

土師器杯（47）出土状況（南から）

ＳＫ406土師器杯（30）出土状況（西から）

ＳＫ402半裁状況（東から）

写真図版10

作業風景

発掘調査説明会風景

出土遺物（１）

写真図版12

20

4

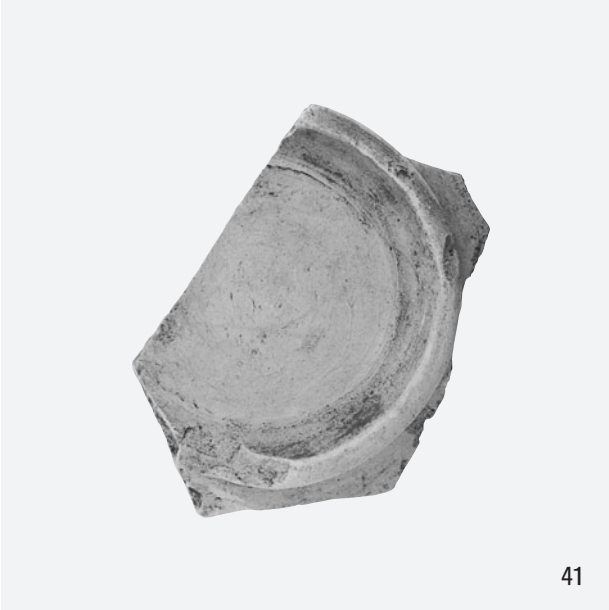
44

43

29

46

47


41

30

出土遺物（２）

報　告　書　抄　録

ふりがな	とりいもといせき（だい４じ）はっくつちょうさほうこく
書名	鳥居本遺跡（第４次）発掘調査報告
副書名	―三重県津市一志町所在―
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３２５
編著者名	西村美幸
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　Tel　0596（52）1732
発行年月日	西暦２０１１年　２月　１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とりいもといせき 鳥居本遺跡	つしいちしちょうおやま 津市一志町小山	24201	h 124	34度 38分 43秒	136度 27分 01秒	20090610 ～ 20090803	301㎡	地域活力基盤創造交付金（道路）事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥居本遺跡	集落	弥生、奈良、平安、室町	土坑、溝、小穴	弥生土器・土師器・須恵器・瓦 （総重量21.6 kg）	

要約

鳥居本遺跡は、丘陵から延びる標高20m程度の低い尾根上に位置する遺跡である。今回の第４次調査の結果、弥生時代中期の土坑６基と、奈良時代から室町時代にかけての溝、土坑等を確認した。弥生土器は、当該地域の第Ⅳ様式の特徴を強く示すものである。

三重県埋蔵文化財調査報告　３２５

鳥居本遺跡（第４次）発掘調査報告
－三重県津市一志町所在－

２０１１（平成２３）年２月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター

印刷　　光出版印刷株式会社